

天璋院篤姫

上

宮尾登美子

大璋院篤姫 上 宮尾登美子



てんしょういんあつひめ
天璋院篤姫 上

昭和五十九年九月十日 第一刷発行
昭和五十九年十二月五日 第七刷発行

著者——宮尾登美子

© Tomiko Miyao 1984, Printed in Japan

発行者——加藤勝久

発行所——株式会社講談社

東京都文京区音羽一三三三 郵便番号二三 電話東京〇三—九四—二二三 振替東京八—五三

印刷所——信毎書籍印刷株式会社 製本所——株式会社黒岩大光堂

定価——一二〇〇円

落丁本・乱丁本は小杜書籍製作部宛にお送りください。
送料小杜負担にてお取替えいたします。

ISBN4-06-200560-3(0) (文1)

天璋院篤姫 上 目次

出立 5

入輿 125

継嗣 231

装画 加山又造

カバー画「春秋波濤」(東京国立近代美術館所蔵)より
表紙・見返し・扉画「雪・月・花」の「雪」より
装幀 中島かほる

天^{てん}璋^{しょう}院^{いん}篤^{あつ}姫^{ひめ}

上

出 立

一日に七たび色が変わるといふ桜島の姿を、寅刻に仰ぐのは今日が初めてで、そしておそらく、これが最後になるであろうと篤姫は思いつつ、老女の幾島に手を取られて庭に下りた。

夜明けの桜島は、肩の辺りからほのかな桃いろに染まり、噴煙は線香のように細くまっすぐに立ち昇っている。

さきほど、座敷で別れの盃を賜わり、

「桜島も今日は至極おとなしい。於篤の参府を祝う如くに見ゆる。道中つつがなきように、」
という、父の島津斉彬のはなむけの言葉を聞いて、篤姫はふっと涙ぐみそうになったが強く齒を噛んでこらえ、しっかりした声で礼を述べた。

斉彬の見送りは、この鶴丸城御書院の座敷までで、あと篤姫は二の丸下にととのえられた駕籠まで、御発輿総指揮官の御側御用人向井新兵衛の先導で徒歩で下りてゆくことになる。

朝露を含んだ萩の花は道々にもこぼれており、総勢五十八名の隊伍はその場所にあるじを待ちうけていて、篤姫は幾島の介添えで赤いかいどりの裾を一度高くさばいてから駕籠のひとつとなった。

この駕籠は、斉彬の妻、英姫所用のものだが、娘篤姫の参府のためにはるばると江戸から差廻し

てくれたもので、長い道中を慰めるよう、内部にはさまざま趣向を凝らしてあった。

脇息きょうそく、白絹の厚い座蒲団、花鳥を描いた天井としとみ、手遊びものを入れる小簞笥さだり、そして前には喫茶などのときの、折疊さつたまみの小さな卓まで取付けられてある。

これに乗って薩摩さつまから江戸まで四百十一里、道中休まずひた走っても一ヵ月余はかかる長旅だが、篤姫の場合は途中大阪、京都にとどまって諸家に挨拶に上らなければならぬため、二ヵ月以上の日取りを見込んである。

ときに嘉永六年八月二十一日、この日を出立と定めるまでには多少の曲折があり、その第一は、先々月六月二十二日に第十二代將軍家慶いんぎょうが薨じ、国中に喪が発せられたことで、篤姫にとっては近い将来、舅になるやも知れなかった家慶公なら、五十日の喪明けを待ってからでなければ憚りがあつたことと、それに大阪まではほとんどが海路だから、薩摩の古老たちのいう、「舟旅は七の字の日」に発つて九の字の日に帰るな」との信仰をまんざら無下にすることはできぬ、とこれは幾島の主張でもあつた。

舟旅は舟子をわずらわさねばならず、そうならこの男たちの、「旅に出るときはタッワケ(なた豆)を食え」とか、「タッワケを持たせよ」の習慣にも耳を傾けねばならないが、ただこのなた豆は、上のほうから実のり始め、だんだん莖きのほうに帰ってくるこの縁起であつて、無事帰着を祈る意味を考えれば、このたびの篤姫の旅立ちは二度とふたたび、この地を踏む日もあるまいと思える片道道中なのであつた。

二の丸から発した行列は、お角櫓の下を通過して楼門を出、道を東へ取って吉野橋を渡つた。

朝もやの中からもう陽はさしはじめており、列は堀の内の角を曲つて篤姫の生家、今和泉邸いまいずみの正門へ向つてゐることが、駕籠のなかにもよく判つてゐる。

のぞき窓のすだれ越しに、ついこの春まで日々見馴れた門のわきの松の枝が見えてきたとき、篤

姫は思はず駕籠の戸を一寸ばかり開けた。

この早朝、門の前には、今和泉郷の領主、島津安芸の妻お幸の方が立っており、そのわきには従者とともに兄忠冬、三兄峯之助が添って篤姫の駕籠を待ち受けているのであった。

しかし、あらかじめいい渡されていたとおり駕籠は地に下りず、短い時間立止ったままの駕籠にお幸の方は走り寄ったが、はっと気がついたように地面に膝をつき、

「篤姫さまには何とぞ末長く堅固でおすごしになられますよう、また道中のご無事をお祈り申し上げます」

と挨拶し、頭を垂れたまま小さな包みをさし出した。

篤姫は胸がいっぱいになり、包みを押頂くと身を乗り出して、

「母上さま、兄上さまにも、どうぞご機嫌うるわしゅういらせられますよう」

と頭を下げたが、その顔を上げないうちにもう向井新兵衛の号令がかかり、隊伍は動き出した。

腹をいためた娘を篤姫さま、と呼び、地にひざまずいて挨拶する母のお幸の方のかしらに、白いものがたくさん降っていたのを篤姫は強く目の底に灼きつけたまま、いま手渡された紫のふくさ包みをそっと頬に当てた。

女はいずれ生家を出るもの、とは覚悟していても、こんなに遠く隔てられるとは考えてもいなかっただけに、篤姫はその包みを、まるでお幸の方そのもののようになうやうやく大事に、膝の上でそっとひらいた。

なかには、巳年のお幸の方の守本尊、一寸ほどの金無垢の普賢菩薩像を納めた古金襴の袋があった。

篤姫が生れたとき、信心深いお幸の方は今和泉家の菩提寺、光台寺の住職に命じて申年の守本尊大日如来を作らせ、それを篤姫の念持仏としてくれたが、いまこの普賢菩薩像を見て、篤姫は母の

氣持がまっすぐに通ってくるように思えた。

お幸の方はきつと、ゆくすえ運命のままに展けてゆくであらう篤姫との生涯の別れに際し、これからは普賢菩薩が自分に代ってそなたの身を守るであらう、といい、そして家に残した大日如来をそなたと想着て、朝夕祈念を怠らぬつもりじゃ、と告げたかったに違いなく、篤姫にはそれがありと判るのであった。

有難き母上さまの思し召し、と篤姫は守袋をいく度も撫でて押頂き、それを懐深く納めた。

隊列はまもなく海岸へ出、弁天橋の舟着場から駕籠ごと舟に乗ったが、大隅の垂水に着くまでのあいだ、篤姫は幾島に乞うて船上では艫に立った。

舟は錦江湾の波を分けて早足で進み、さして揺れもせず、こういう晴天の日は、南の方に篤姫が幼い頃を過した今和泉の山々がくっきりと手に取るように望まれる。

篤姫の実父、島津安芸忠剛は、島津本家から分れたご一門四家と呼ばれる重富家―島津周防、加治木家―島津兵庫、垂水家―島津讃岐に連なる今和泉家の当主で、出生は、現藩主斉彬の祖父に当たる斉宣の五男だが、今和泉家第九代忠喬に男子がなかったため、藩主の命により、二十歳にして養子に入ったひとである。

島津本家が家を興したのは遠く中世の頃、薩摩、大隅、日向三国の守護職となり、源頼朝から島津姓を賜ったのが始まりだといわれているが、以来斉彬まで二十八代、薩隅の内乱を抑えたり、文祿慶長の役には朝鮮出兵もし、また琉球をも平定してこんにちまでおよそ六百十年の長い繁栄を続けている。

薩摩藩がいま所領七十七万石を有し、加賀の前田家に次いで天下第二の強藩といわれる理由にはさまざまあるが、何といっても関ヶ原以降、この地に移封された大名ではなかったこと、また早くから根付いて増えた血族たちを、二十二代継豊の時代に組織化して秩序をととのえたのもひとつの

功ではなかったらうか。

繼豊が定めた階層は、他家へ養子の条件を持つ本家の次男以下を配して、まず、さきに挙げた四家を本家に次ぐ家格とし、次は一所持ちという一郷の領主を二十一家、このうちからさらに都城、宮之城、花岡、日置を四家と定め、以下一所持格四十一家、寄合五十四家、寄合並十家までを大身だいしん分と称して上士扱いとした。

こういう取り決めもあって、本家は現藩主まで、養子は迎えても皆血縁があり、一族は本家を頂点に富士の裾野のように下へ拡がり、藩主を太守さまと崇めて、事あるときにはこれら分家が藩を支える大きな力となっているのであった。

今和泉家の成立も、繼豊の弟、忠郷を以て一所持ちと定められ、揖宿郡のうち小牧、岩本、西方、池田、仙田、利永の各村を賜わって三千五百石、そして宝暦年間にはさらに佐多郷が加えられて一万五百石となり、いまは一万一千石の小名として家格を保っている。

領地は薩摩半島の南端にあり、一年中氣候温暖ですごしやすく、今和泉本邸は城下恵橋に定められていたが、別邸は岩本村の海沿いにあった。

いま船上から伸び上って望む紺碧の海の向うには、別邸名物の黒ガネモチの老樹が亭々と聳え、篤姫の今日の首途をはるかに祝ってくれるように思われたが、もとよりそれは気のせい、水平線の上には一塊の低い山脈が横たわっているばかりであった。

篤姫が生れたのは天保七年の二月十九日で、この日は朝から大雪だったと篤姫はたびたびお幸の方から聞かされている。

忠剛とお幸の方とのあいだにはこのとき、九歳の長兄忠冬と、のちにお幸の方の実家を継ぐために家を出た七歳の次兄久敬ひさたか、それに四歳の三兄峯之助が育っていたが、女子は初めての誕生だった

ので忠剛は大いに喜び、初名を於一^{おかつ}、と名付けた。

一は長女の意味もあつたろうが、奥老女菊本の語る、

「大きなややさまでござりましてな。母上さまは大分ご難渋なされました。兄君さまお三方は皆お小そうおわして、お方さまは産屋でついそ弱音を上げられたこともございませなんだのに、今度ばかりは『取られるやも知れぬ』と仰せられたほどでござりました」

という言葉葉を聞けば、女ながらも兄妹のなかでこの子が一、という望みをも、忠剛は託したのではなかるうか。

それというのも、兄三人はいずれも父忠剛に似て蒲柳の質で、よく患い、そのせいかどこか気弱なところがあつた。

菊本は最初忠冬の養育係だったが、今和泉家十一代の継嗣にしては忠冬があまりに身心ともに脆弱^{じやく}なのを嘆き、体を鍛えるため、忠剛に願って幼児時代のほとんどを岩本村で過させる方針を撰^{せん}った。

別邸は、本邸の間取りを写して表には城壁を囲い、老松を配していかめしく作られてあつたが、裏座敷は海に面していて、とくに夏場が涼しかった。

座敷から草履をはいて庭に出、石垣のあいだの段々を十ばかり下りると、そこはもう砂浜になっており、つい目の前には波が打寄せていて、子供には絶好の遊び場所であつた。

菊本は毎日、忠冬の手をひいて自分は裾をからげ、草鞋をはいてこの砂浜はもとより、岩本村の山野を駆け歩いたといい、その効果あって、幼名三之助から忠冬と改名して世子の式を挙げたときには、感極まって泣いたという。

篤姫の誕生とともに忠冬から篤姫の係へと移ったが、その述懐によれば、
「それはそれはおやしやうい姫君さまでござりました。

お好きお嫌いがはつきりしておさじやいもすし、何よりお体がお強うおわして、めったにお床におつき遊ばすことはございませんでした」

と邸ではご法度の地下の言葉じげを混えながら菊本が語るとおり、篤姫は兄三人をしのいで体格もよければまた目に見えて利発でもあった。

篤姫が姫育ちの身分に似合わず、幼い頃よく兄たちと一緒に遊んだのは、この菊本がかつて忠冬の係であったことや、また、子供たちは皆長兄に習って、一年の大半を別邸で過したことも理由のひとつであつたかと思われる。

本邸では万事しきたりがきびしくて、子供たちは一堂に集つて大声を挙げることなど固く禁じられていたし、それに何より、それぞれ学問や稽古ごとに追われる日々だったから、子供同士遊ぶ暇とてなかった。

別邸へは、忠剛は折々顔を見せたがお幸の方は来ず、それというのも側室お雪の方とお春の方がずっとこちら住居であつたためらしい。

子供たちは別邸へ来ると自由にのびのびとはしゃぎ、お付きの者の目を盗んで兄妹喧嘩もすれば食事もいつも一緒に、菊本もときどき、

「うんだもう、」

などと地下言葉の感嘆詞を挙げて叱つたり制したりするほどであつた。

浜辺に常緑の葉を拡げている黒ガネモチの大樹の下はいつも子供たちのよい遊び場所で、兄たちがこの木からトリモチを作るために木の皮を剥いでいるのを、篤姫はじっとそばで立って見ていた記憶がいく度がある。その記憶につながり、いまでも脳裏に刻印されている光景があつて、それはたしか、篤姫五歳の夏ではなかつたらうか。

よく晴れた日の夕方で海は油風ぎ、ところどころにすなどりの小舟が浮び、左手の桜島は全山夕

陽を浴びて朱に染まっている景色のなかで、子供たちの一団はじゃれあいながら次第に侍女たちの群から離れ、そこから先へ出てはならぬという邸の境界線まで近づきつつあった。

城壁の向うは松原になっており、いま湾内の漁からぼつぼつと帰ってくる舟があつて、ふと忠冬は、もの珍しさにいちばん邸に近い波打際に舟をつけた人かげのそばへ、吸い寄せられるように寄つて行つた。

鱸綱を浜に投げて舟底に砂を噛ませたのち、生簀から魚籠に獲物を移しているのは、どうやら年恰好も忠冬と同じくらいの少年らしい。

忠冬は、はねている魚が見たくてそば近く寄り、魚籠をのぞき込んだところ、少年は取られると思つたのか、突然大声で、

「あっこ、どげんすつと」

と怒鳴るなり、魚籠を体のうしろに隠して身構えた。

そのとき、忠冬のすぐうしろにいた篤姫は咄嗟に浜の砂を掴んで走り寄り、兄をかばつてその砂を少年めがけて投げつけた。

砂は一瞬煙幕となり、風の方向に流されていったが、このとき、もし菊本が転ぶようにして駆けてつてこなかったら、次に自分はどうしていたらうか、と篤姫はその後もとどき考えることがある。少年の目には憎悪がめらめらと燃えていたし、もし反撃に出られたら怪我のひとつもしていたかも知れないが、しかしあの際、何はともあれ弱い兄忠冬をかばわずにはいられなかったことを篤姫はくり返し思うのであった。

この件は、菊本が侍女たちに緘口令をしいたにもかかわらず徐々に拡がり、本邸にまで聞えて、菊本はただちに呼び戻された。

忠剛の前に召出されたとき菊本は、篤姫の監督不行届をきつく叱責されるものと覚悟していたが、

ご下間は意外に、

「そのとき、忠冬は何をなしていたか」

であった。

咄嗟のことではつきりと覚えてはいないが、忠冬は妹の砂を投げる行為を止めもせず、その場に呆然と突っ立っており、下二人の男子もそれを取巻いて眺めていただけだった、と菊本は思い出しながら言葉を選び選り報告したところ、忠剛は深くうなずいて、

「於^お一^ちが男でなくてのう」

と小さく呟いただけであった。

急ぎ呼び返された菊本はいたく拍子抜けし、ひとり考えて、殿さまはきっと世子たる忠冬の腑甲斐なさを嘆かれ、十四歳の男子が五歳の妹にかばわれるとは何事か、と強くご意見遊ばすに違いない、と推測したが、実際にはこの件は尻すぼみでこのままに終ってしまった。

思うに忠剛は、三人の男子のなかに自分の性格の弱さをまざまざと見たものと考えられ、当主として世子に訓諭する熱意を失なってしまったのではなからうか。

忠剛には心身ともにひ弱い面があり、それは本家育ちとはいいいながらも庶腹の五男だったし、早くから他家へ養子の運命を担ってそれなりに教育されたところがある。

が、お幸の方は、一所持二十一家のなかの島津助之丞久丙の娘で、そして篤姫と同じく兄三人を持つ一の姫として育った境遇から日頃篤姫を眺めつつ、自分の幼い頃に引き移し、とひそかに感じ入ることもあったという。

忠剛に糾明されなかった菊本はほっと安堵し、あらためてお幸の方に深く詫びたところ、

「殿は於一が男じゃったら、と仰せられたそうな。ほんとに私もそう思います」

といって可笑しそうに声を挙げて笑ったが、その笑い声まで姫君さまそっくり、と菊本は思った。

あたり前なら、殿はお叱りにならずとも、お方さまはいたく嘆かれ、

「女子のあられもない。そのように育ててはさきゆき本人のためにならぬ。以後はきつと氣を付け
るように」

ぐらゐの譴責けんせきはあるものと思つていたのに、お方さまはまことにとおらかでお心広いお方、と菊
本は改めてそう思つたものであつた。

忠冬はこの翌年の四月、忠剛に従つて鶴丸城に初登城、藩主にお目通りを許されて正式に世子と
認められ、二年後には日置家から室を迎えて田の浦の別邸に住むことになる。

ただ菊本は、この件以来、篤姫の傳育について重い責任を感じるようになり、それはいままでの
ように、病氣させず、行儀よく、しっかりと學問をつけさせる、だけでは足りない、何か大きなも
のを背負い込んだ思いがあり、ときどき鏡をのぞいては、白髪を抜きつつ、

「姫君さまがよか嫁女さあになるまではまだまだ、」

と自分を励ますのであつた。

篤姫は記憶のよいたちで、菊本などうっかり見過していることでも鮮やかに覚えており、とりわ
け家うちの大小の出来ごととは、子供ながらも男のようにしっかりと目で捉えていることがあつ
た。

忠冬が藩主にお目見えした年の秋、第二十六代藩主島津斉宣なりのおきが江戸高輪邸で薨じ、翌天保十三年
の正月、その靈柩が故郷に戻ることになつたとき、忠剛は二十七代当主斉興なりのおきが病氣のため、代つて
木主を勤めることになつた。

一門四家の禄高では今和泉家は末尾だが、斉宣は忠剛の実父にあたるので、忠剛は男子三人を連
れてはるばると北端の出水郷まで隊伍を整えて出迎え、この地の福昌寺で葬送の儀を執り行なつた
のであつた。